

# 末野野

すぐろの

8月号

(通巻912号)



## 二人三脚

森清堯

馬の背の茅花銀波をなびかせて  
白き嶺の風は湖畔へ遅桜  
桜葉降る長椅子や日のぬくみ  
凌ぐことばかりのくらし蝮の道  
蝌蚪生る汀の国の乱れけり  
漕ぐやうに掻き分け進みつじ山  
空の青声に込めたり揚雲雀  
万歩来て坐したる石や花薺  
あわただしき空の八十八夜かな  
葉桜や堀に舫へる屋形船  
五十年を二人三脚五月来る  
川風に自信たつぷり五月鯉

## 陽炎

岡野里子

一湾をまたぐ吊り橋風光る  
鑿ふるふ石工の背陽炎へり  
潮風のとどく丘の上つばくらめ  
羊蹄や野川に軋む水車  
鉄錆の著き火の見や著莪の花  
鎮守への直ぐなる道や山桜  
山里の流れ狭めてみづがらし  
花冷や運河に光る金気水  
砂山の日暮れて風の母子草  
乙姫のつけ爪なるやさくら貝  
異国の店増ゆる通りや花水木  
惜春や靄る港の百千船

# 草屋

黒滝志麻子

(顧問)

ハードルを越ゆるたてがみ若緑  
 芹青む日がな瀬音をまろばせて  
 チューリップ一株ごとに園児の名  
 根上りの松隆々と夏来る  
 禅林の真昼の無音夏はじめ  
 直線も曲線も好き夏燕  
 摺り足にきしむ草屋ほととぎす  
 草刈つて大地を少し広めたり

## 甲矢集

### 潮曇

石黒興平

舩挿すや比叡山伊吹山と雲の無く  
 目の前の山のかがやき木の芽吹く  
 鎌倉の故事茫洋と花明り  
 囀の真つ直中や一里塚  
 自転車の補助輪とれて入学す  
 行く春やマストのまとふ潮曇  
 曳船の遅々たる運河薄暑光  
 田水張り空の青さを引寄せて  
 ひとしきり話の弾む新茶かな  
 麦の秋米穀通帳抽出しに

### 落椿

菅野日出子

孫に手を借りて終りぬ雛納め  
 悪夢より醒めて夜更の春の雷  
 小流れの先は暗渠や落椿  
 足音に寄り来る鯉や水温む  
 春装のつどふ大会華やげり  
 禅寺を望む窓辺や百千鳥  
 石段の小さき割れ目や蜥蜴出づ  
 句に遊ぶことの幸せ翁草  
 富士望む寺尾台地や新樹光  
 向日葵の背のびして見る花の精

# 残日録

田中臥石

八十余歳生き春寒く臥石臥す  
大多喜の空濠を埋む蘆の角  
桜散つてしまへり疾うに重行忌  
傾ぎつつ往く菜の花の一輛車  
春塵の炉煙舎雑筆椅子机  
臥石一代限りの詩句やさくら散る  
春惜しむ老兵といふ臥石をり  
五月来て一吐丁雨の忌も過ぎぬ  
老の刻五月もあつといふ日暮  
名も知らぬ草踏んでをり薔薇の園

# 夏来る

森清信子

岩打ちて渦なす川や花筏  
対岸は靄より覚めて花水木  
おたまじやくし探す眼の輝けり  
梨の花防風林に囲まれて  
湧水の水底へ日矢夏来る  
木香薔薇アーチをわつとうめつくし  
子より受く嬰抱くやうにカーネーション  
洋館の昼深閑と薔薇の垣  
五十年連れ添ひて新緑の苑  
峡の日の遠退くあたり山帽子

# 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



若葉風

犬川暉美

濃く淡く連山染むる遠桜  
対岸のけぶれる浦曲春の雨  
こでまりの連なり風に弾みけり  
水音の高き早瀬や若葉風  
さざ波の光さ走る代田かな  
寂として牡丹虚空へ色解きて  
ぼうたんや葉蔭に紅を尽くしたり

卯の花腐し

今村千年

男

波

太田良一

いつしかに庭いちめんの諸葛菜  
花水木きのふと違ふ空の色  
黄昏の出船入船海朧  
ひさかたの空はさみどり揚雲雀  
元町のパン焼く匂ひ夕薄暑  
かはたれの谷戸は卯の花腐しかな  
重忠の戦の跡や麦の秋

朝寝して夢を枕に忘れけり  
光る矢を放つ水面や夏に入る  
半袖の増ゆる江ノ電今朝の夏  
ちぬ釣りの竿に伝はる男波かな  
帰去来の叶はぬ夢や夏つばめ  
葉桜や姿を見せぬご神体  
黒揚羽寺領の樹々をほしいまま

卯月浪

岡田史女

朝よりの雨や遠くにメーデー歌  
老鶯や竹百幹を抜けて来ぬ  
婚五十五年目迎ふ聖五月  
五位鶯の冠羽かがよふ風の中  
対岸は空港の灯や卯月浪  
かはほりや水の膨らむ鶴見川  
風五月沖繩本土復帰の日

廃坑の町

小田嶋野笛

味噌焦ぐる匂ひ道まで菜飯茶屋  
夕つばめ利根の川面を切り返し  
旅に疲れ話に疲れ夕桜  
夕風へ其の身ゆだねて花や散る  
寂しさの痛みにも似て花の酔  
廃坑の町の廃校リラの花  
半歩づつ詰め寄る間合恋雀

初

燕

加藤静江

ささら波の運河狭しと初燕  
草の秀へ触れむばかりや初燕  
夕晴やしづくの光る草若葉  
名利の瓔珞燦と春なれや  
無住寺の朝の静寂や里桜  
落椿花の重さを手に受けて  
ゆつたりと風の大樹や聖五月

青

岬

高木邦雄

トロットのたてがみ光る立夏かな  
濃きひげの鍾馗の幟翩翩と  
浅酌の膳に添ふるや冷奴  
青岬目路の果なる島暮れて  
賜るる色紙揺るるや夕薄暑  
敦盛草うすくれなゐの母衣揺れて  
夕さりの美酒に微酔の端居かな

蝮の道

長尾タイ

佐保娘の結ぶえにしや灯る家  
じやんけんのちよきの後出し燕来る  
紆余曲折明日の見えぬ蝮の道  
片足の鶯の孤高や柳絮飛ぶ  
種下し谷戸田に老の影二つ  
古民家の土間の煙や武者飾り  
竹樋の溢るる水音葦青む

野遊

池乗恵美子

街川の日の斑に紛れ柳鮠  
貝寄風やボトルメールの何処より  
母の忌の桜薬ふる夕べかな  
佐保姫の目覚めて山のささめけり  
桜満つ百万石の空展げ  
老幹の気魂渡らせ山桜  
野遊の影くれなゐに暮れにけり



青炎集

森清

堯選



平塚

尾崎千代一

横浜

渡辺富士子

大寺の近き疎水や青時雨  
鮎乗する呉須の絵皿の葉風かな  
居酒屋の庭の罍や白日高  
滝壺の碧き深みの飛沫かな  
丹田のわづかの力み雲の峰  
城跡の近き菓子司や麻暖簾

のどけしや八十路五人の気儘旅  
ふらここや老の夫婦の痴話喧嘩  
齒車の合はぬ会話や四月馬鹿  
田子の浦の千本松や半仙戯  
花に酔ひ花に惑ひてはや日暮  
碑の梵字の薄れ花まつり

横浜

新倉ゆき江

町田

中野千代子

旋律の和音乱れぬ花見鳥  
煩惱の願ひは四つクローバー  
桜湯や小さき吐息の波立ちて  
飛花落花まとふ撫で肩怒り肩  
浮かびぬる青き地球や清和の天  
ロープウェービルの谷間の若葉風

新緑や風沸かしゆく一輪車  
葉桜の並木ピザの香擦れ違ひ  
夏布団夢は異国の船の旅  
銀の船飾る出窓や夏館  
手作りの水羊羹の歪みかな  
歴史めく白の滲みや夏暖簾

大網白里

岡井マスミ

宮城

門間としゑ

たたみきて伝ふるは何春の潮  
剪られては大道具めく桜かな  
夢はまだ膨らむばかりしやばん玉  
野を分けて長き電車の陽炎へり  
願掛けの十段の磴藤の花  
鳥声に新樹膨らむ古刹かな

母の日や小ぶりの鋏を貰ひたる  
手を皿にそら豆の青いただきぬ  
狭山より深蒸し新茶速達便  
駆け上る駅階段の緑雨かな  
花あやめ食の細れる兄見舞ひ  
一軒となりたる魚屋軒菖蒲

横浜

武田ナオミ

横浜

神谷さうび

吟歩するいつもの道や薄霞  
春薄暮サインポールの道案内  
木の芽和の箸休めなる昼餉かな  
花老いて影を濃くせり夕明り  
春コート馴染の道を闊歩して  
日日草自由自在の高架下

八橋や音に乱るる蝌蚪の国  
湯上りやこむらの重き花疲  
外つ国の木偶の供養や春うれひ  
後朝の文かも知らず落し文  
薫風や神鈴の緒を揺らしゆき  
親竹の胸の高さや今年竹

新潟

五味紘子

横浜

横路尚子

束の間を華やぐ古木花杏  
夕映えの代田眩しき水鏡  
到来の新茶や友の若き声  
鋭角の葉先鎖骨へ菖蒲風呂  
川風をはらみ数多の鯉のぼり  
雲上に立ちたるやうや牡丹園

樹齡百空へ湖へと花吹雪  
モダンなる門扉の国旗昭和の日  
咲き初むる紅薔薇繋ぐアーチかな  
葉桜を背に自撮りの少女かな  
見渡せば真直の緑段葛  
白く散る様の気高さえごの花

# 耕 土 集

## 岡野 里子 選

うららかに背に仰け反る児の眠り 横浜 白居 澄子  
山際のつらつら椿野菜畑  
柏餅夫と汲む茶のまつたりと  
麦秋や往時の郷を慕ふ景  
手を上げて子らの横断四十雀

桜葉降る畝の間にたまりけり 狭山 谷安喜美子  
岩肌をてらてら伝ひ山清水  
母の日に曾孫誕生腰伸ぶる  
雨粒のきらりと光り若葉風  
梅花藻の下は魚のユートピア

散りてなほ歩道彩る桜かな 横濱 河野 礼子  
急流の悲鳴歎声夏来る  
竹の子掘る研ぎ澄ましたる足の裏  
歳忘れ孫の倍喰ふ柏餅  
上げ潮に抗ひ進む海鶴二羽

静けさの糺の森や八重桜 横濱 鈴木千恵子  
夜桜や叡電の灯に艶めきて  
藤の花羽音聞こゆる昼下り  
ままごともゴム飛びもなき昭和の日  
小袋の糠と筒京都より

房総へアクアラインや花菜畑 横濱 小林 拓路  
小手毬や子犬のワルツ洩れ聞え  
手入れせぬ庭晩春のカオスなる  
掘り返すスコップの土夏隣  
散髪やすつかり街は夏めきて

春風や駅の階段二段づつ 横濱 玉川 利江  
飛行船のそろりそろりと春の空  
容赦無き雨に打たれてチューリップ  
二個買うて妣と分け合ふ柏餅  
直に待つドアより友と紋黄蝶

思ひ出す田舎のだんご初蛙 狭山 小林 友子  
筍や飛行機雲の長長と  
蒼天へ背のびする子や夏始  
夏来る青一面のカレンダー  
逆光に立ちて写すや薔薇の庭

餅撒きて目出度く終はり居開帳 宮城 京極 久也  
歳時記の著き手垢や目借時  
遠足の子ら触れたがる羊の毛  
漱石の坊つちやんに会ふ曝書かな  
初蛭狩りたる小川里の夜

山吹や訪ぬる家の黄のポスト 横濱 平野 秀子  
竹の皮ぬぐや腕のギブスとれ  
ハワイアンにただ揺れてをり夏の雨  
りすの尾に騒めく樹々や緑さす  
俣屋の脚のりゆうりゆう夏柳

額打つ枝葉のしなり春疾風 文京 大曲ゆき枝  
菖蒲風呂湯屋の牛乳よく冷えて  
木苺を植うる朝や震度三  
居酒屋の古りたる桶や露浸し  
本郷は三叉路多し杜鵑花咲く

身延の桜妙法聞きて四百年 横濱 村田 敦子  
閑けさや雨に打たるる糸桜  
忍冬の花の匂へり迷ひ来て  
雪の下しぶきを受けて群れ咲けり  
雨やみて大樹の空に飛ぶ揚羽

岩肌に碎ける波や青嵐 三浦 田中由紀子  
浦風や丘の駅舎の初つばめ  
花は葉に人の影無き石畳  
柏餅既に未子は一家成し  
鯉のぼり相模の海の風孕み

伊勢参り赤福餅を家苞に 横濱 三浦千恵子  
父の掘る独活の旨さや天婦羅に  
晴天へ続く青野や踏みしめて  
ランチへと子と待ち合はせ薔薇の花  
駅までを往復歩き夏始

藤の花うす紫の風に揺れ 横濱 毛利 直子  
戦無き七十余年こどもの日  
母の日や仏の母に会ひに行き  
友ひとり届かぬメール夏に入る  
愛用のミシン古びぬ麦の秋

春光や太刀を洗ひし古き井戸 横濱 森 由佳  
軍港に釣り糸垂らしうらかけし  
岩陰の堇の花や淡々と  
交番の軒を歩き来や夏燕  
聖五古刹の中のカフェテラス